

月刊

地域保健

7
2009

●
特集

子ども虐待を防ぐ7つの話題
知識を深め、効果的な取り組みを探る



JURI
2009
JULY

● FACE2009

河原加代子さん

首都大学東京健康福祉部看護学科教授



最高の動機づけはお仏壇へのご報告?!

奥多摩町の「健康歴」から臨む次へのつながり

首都大学東京健康福祉学部看護学科教授

河原加代子さん

photographs
Sei Kamiyasu

誰もが一度は泣いた経験のある、互換性のないデータ同士の処理。東

京都西多摩郡奥多摩町では、過去18年分もの基本健診受診者データを整理し、介護保険利用時にリンク可能なシステムづくりが進んでいます。

町、保健所、大学の三者が連携するこの「奥多摩町健康創造プロジェクト」において、西多摩保健所とともに大きな役割を担う首都大学東京。担当教官の河原加代子教授が「成功秘話」を教えてくださいました。

既存のデータの利用、再構築で健康課題を解決!?

—河原先生が指導されている「奥多摩町健康創造プロジェクト」はどのように始まつたのでしょうか。

編・統合して開学しました。この荒川キャンパスは元都立保健科学大学で、学部から大学院の博士課程まで、他の

キャンパス同様、設立団体である東京都からの交付金等で運営されています。

開学当時、西多摩保健所の地域保健推進担当副事から、

「奥多摩町には生活習慣病、脳卒中にによる特に女性の死亡率の高さ、肥満、高脂血症など、住民の健康に関して課題がある。また、基本健診の受診率が多い。大学と協働し、予防の段階か

— 大学は具体的にどのように活動されたのでしょうか。

河原 即解決できる手段はありませんから、データを使う地区診断で、まずは現状分析することになりました。1989～2006年度末まで18年間の健診データからBMI、収縮期血圧、総コレステロール、HDLコレステロール、HbA1cの5指標を使い、変化を確認するというものです。

— ところがここで大問題が発生しました。年によって健診の項目が微妙に異なり、同じ人の結果を年ごとに追うことができないことが分かったのです。

首都大学東京は平成17(2005)年度に都立保健科学大学、都立大学、都立科学技術大学、都立短期大学を再

ら長期的に町の健康を支える仕組みをつくりたい」

との申し入れがありました。そこで2008年の3月に、基本健診データから分析した第1報をまとめたところです。

平成16年度の児童虐待防止法改正により、市町村も子ども虐待の通告先に位置づけられた。同年には「育児支援家庭訪問事業」、19年度には「生後4か月までの全戸訪問事業（こんにちは赤ちゃん事業）」がスタートし、両事業の要となる要保護児童対策地域支援協議会（子どもを守る地域ネットワーク）を設置する市町村は9割を超えた（20年4月1日現在）。新生児訪問を中心に虐待の予防に取り組んできた保健師には、これらの事業の実施はもちろん、マネジメントが期待されているところである。

しかし、児童福祉法に基づく両事業と母子保健法に基づく従来の新生児訪問事業との関係について一部では混乱がみられるという。また、性的虐待など、わが国では認知されにくい虐待もあり、母子保健に携わるすべての保健師が子ども虐待に関する十分な知識を得ているとは言いがたい。

特集では、新生児訪問事業、乳児家庭全戸訪問（こんにちは赤ちゃん）事業、養育支援訪問（育児支援家庭訪問）事業を効果的に進めるための視点を整理とともに、子ども虐待予防に関する最新の知見についてまとめた。

p16 話題1 子ども虐待の動向と国の取り組み

厚生労働省 雇用均等・児童家庭局 右田周平

p24 話題2 切れ目のない子育て支援

乳児家庭全戸訪問事業・養育支援訪問事業

国立保健医療科学院 中板育美

p32 話題3 虐待は子どもの将来に深刻な影響を及ぼす

山梨県立大学 西澤 哲

p38 話題4 性的虐待の実態と対応

エンパワメント・センター 森田ゆり

p45 話題5 貧困と子どもの虐待

札幌学院大学 松本伊智朗

p48 話題6 摆さぶられ症候群

国立保健医療科学院 藤原武男

p52 話題7 代理によるミュンヒハウゼン症候群

国立成育医療センター 奥山真紀子

p56 〈事例〉 早期母子支援システムが成果を結ぶ

横須賀市の取り組み

取材・文 編集部



特集 子ども虐待を防ぐ 7つの話題

知識を深め、効果的な取り組みを探る

潟上市健康推進課天王保健センター

●文・写真 西内義雄（医療・保健ジャーナリスト）

就職したのは実習先の保健センター
ただいま「住民の目線」を習得すべく奮闘中！



優しい笑顔で周囲を明るくする



 実習で血を見て倒れる

生まれたのは県内の横手市。小学校2年生まで住んでいた。
「母が横手、父が潟上（天王）の出身なんです。父は県庁勤めで小学校2年



とても活発だった子ども時代

秋田空港から車で約1時間。秋田自動車道昭和男鹿半島ICから一般道に出るとのんびりした田園風景が続き、昔、社会科の授業で習った八郎潟の案内板を見るようになるころ、目的の秋田県潟上市天王保健センターに到着した。近くには潟上市の天王庁舎や市立保育園、公民館などがあり、天王地区の中心であることがよく分かる。

今回のひよこさんはこの保健センターに勤務して3年目を迎える三浦聰子さん、24歳。センターの中に入つた途端、とても明るい笑顔で接してくれたのが印象的で、色白なところも秋田の女性らしい。

今まで横手、その後転勤で天王に引っ越してきました

横手に住んでいたときは活発な女の子だった。ままごとより戦隊モノに興味を持ち、男の子と遊ぶ機会が多くつ

た。家は三浦さんとご両親、祖父母に曾祖母の四世帯。昔ながらの日本の家庭がそこについた。

中学は地元の公立、高校は秋田市内の県立女子高に進学している。

「中学生のころ、なんとなくですが養護教諭という仕事に興味を持ちました。学校の養護の先生がとてもやさしくていろいろな話を聞かせてくれた影響でしょうか。それと、曾祖母が入院して何度も病院に行く機会があつたのもこのころで、看護師さんたちを見ているうちに医療職への憧れも少しずつ大きくなつていて思いました」

一方、高校では臨床心理士への興味も持つようになつた。どちらの道を選ぶかで卒業後の進学先は変わつてくる。そこで二浦さんが選んだのは、大学と看護学校の2つとも受験する道だつた。大学は臨床心理士のため。看護学校は養護教諭のためで、卒業後に養護教諭の資格を取るため保健科のある学校を